



一般講演

## ピラミッド型構造物の未知なる機能の実験による発見

—人間との関わりによって生じた現象から—

(Discovery from the Experiment on the Unexplained Functions of the Pyramidal Structure  
-The Phenomenon Caused by the Personal Relationship-)

高木治<sup>1</sup>、坂本政道<sup>2</sup>、世一秀雄<sup>1</sup>、小久保秀之<sup>1</sup>、河野貴美子<sup>1</sup>、山本幹男<sup>1</sup>

(Osamu TAKAGI<sup>1</sup>, Masamichi SAKAMOTO<sup>2</sup>, Hideo YOICHI<sup>1</sup>, Hideyuki KOKUBO<sup>1</sup>, Kimiko KAWANO<sup>1</sup>  
and Mikio YAMAMOTO<sup>1</sup>)

<sup>1</sup> 国際総合研究機構 (IRI) (日本, 千葉)

<sup>2</sup> ㈱アクアヴィジョン・アカデミー (日本, 千葉)

**要旨:**我々はピラミッド型構造物 (pyramidal structure: PS)の未知なる機能について2007年以來、10年以上研究を続けている。PSの研究方法として、PS内部に人間が入り瞑想をした。PSの未知なる機能を明らかにする手段として生体センサ (キュウリ果実切片) から放出されたガス濃度を測定した。生体センサの作成、設置、ガス測定は、零点同時補正法 (simultaneous calibration technique: SCAT) によって行われた。この方法は、国際総合研究機構 (International Research Institute: IRI) で研究開発され、ヒーラーに関わる多くの研究成果を得ている。ピラミッド型構造物と人間とが関わった実験において、次の2つの結果を得ることが出来た。(1) PS内部に人間が入り瞑想する以前に、人間の無意識 (フォースタイプ I) による、生体センサに対する未知なる遠隔作用 (6 km以上離れた地点から生体センサに対して、遅延なく影響を与える長距離の非接触効果) が検出された。(2) PS内部に人間が入り瞑想した後、人間による何らかの影響 (フォースタイプ II) によって、10日間以上続く遅延を伴った非接触効果 (PS内部の人間と生体センサの距離が0.5 mである短距離の非接触効果) が検出された。これらの結果から、ピラミッド型構造物と人間との関わりにおいて、人間から発する2つの異なるフォースタイプがあることが示唆された。しかし、2つの異なるフォースタイプは、PSによって変換速度は異なるが、どちらも生体センサが反応し得るエネルギーに変換され、非接触効果として検出されたと考えられる。ピラミッドパワー (効果) に関する学術的な研究において、統計的に高い有意性のある実験データを示した研究は、我々のグループ以外では皆無である。

**キーワード:**ピラミッド、瞑想、無意識、非接触効果、遠隔作用、遅延、生体センサ、キュウリ、ガス

### 1. はじめに

2007年10月から2017年9月までの10年間にわたって、国際総合研究機構 (International Research Institute: IRI) (理事長 山本幹男) と㈱アクアヴィジョン・アカデミー (代表取締役 坂本政道) による共同研究プロジェクト、“坂本ハイパーテックプロジェクト (Sakamoto Hyper-tech Project: SHyP)” が実施された。プロジェクトの研究テーマは、“ピラミッドパワー (効果) についての科学的な研究”であった。この研究は、プロジェクトの終了後から現在に至るまで、IRIにおいて継続して行なわれている。研究メンバーは著者の6名である (Fig.1(a))。これまで

(2019年1月時点) の生体センサ<sup>[1,2]</sup>を用いた実験結果から、ピラミッド型構造物 (pyramidal structure: PS) (Fig.1(b)) の未知なる機能の一部が明らかになり、次の2つの結果が得られた。(1) PSは、6 km以上離れた人間の無意識 (フォースタイプ I) を捉えて、遅延なく検出可能なエネルギーに変換した。(2) PSは、PS内部に人間が入り瞑想することによる影響 (フォースタイプ II) を蓄積し、時間をかけて検出可能なエネルギーに変換した。ここで、PSによって捉えられた人間の無意識をフォースタイプ I、PS内部に人間が入り瞑想したことによる影響をフォースタイプ II と分類した。我々はピラミッド型構造物には、未だ解明されていない機能があることを、科学的に厳密な実験と解析によって実証した<sup>[3-6]</sup>。ピラミッドパワー (効果) に関する学術的な研究におい

高木治、263-0051 千葉市稲毛区園生町 1108-2 40A

電話:043-255-5481 FAX:043-255-5482

E-mail: takagi@a-iri.org

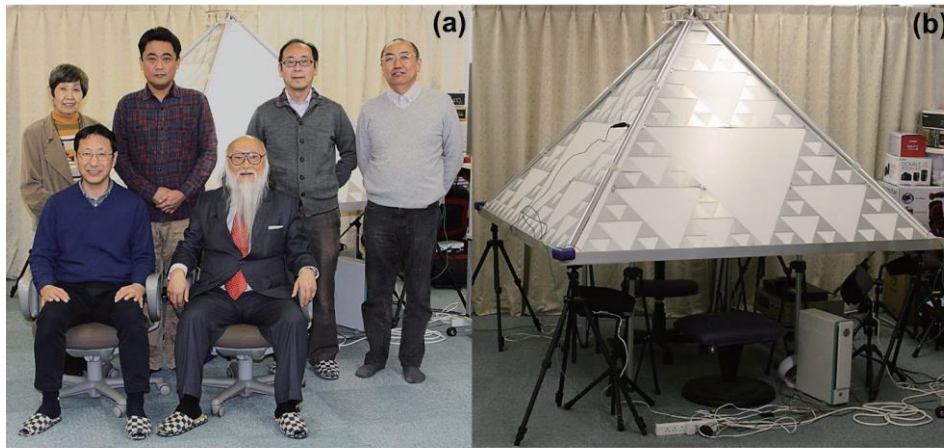


Fig.1 (a)研究メンバー (b)ピラミッド型構造物 (PS)

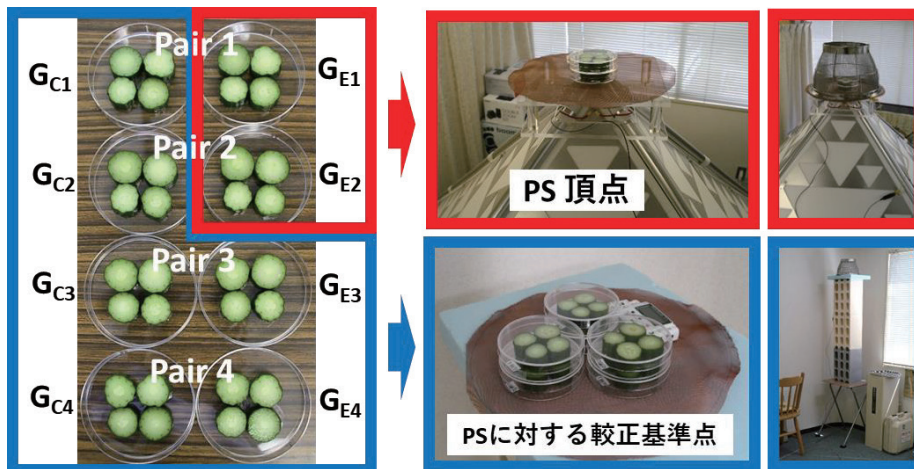


Fig.2 生体センサの準備及びPS頂点とPSに対する校正基準点への試料の設置状況

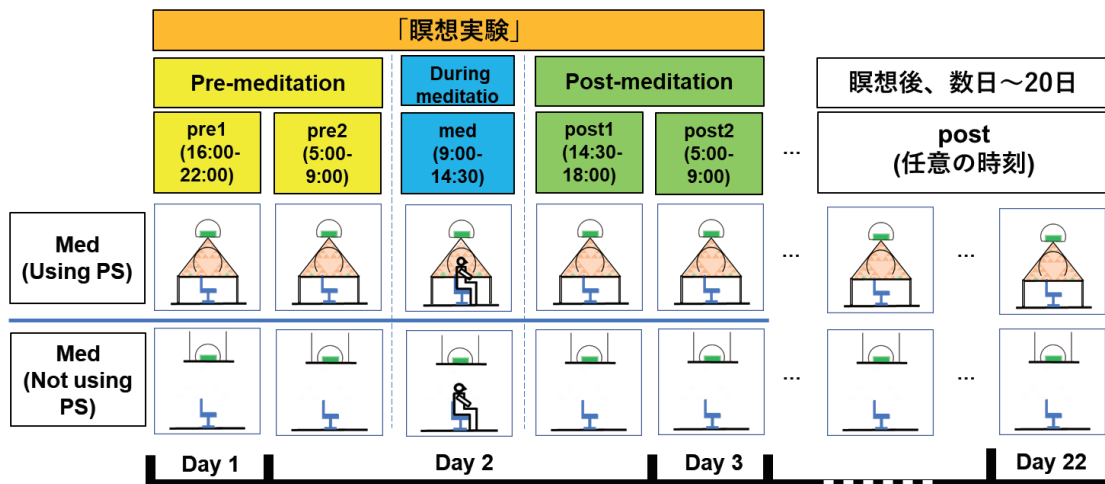


Fig.3 「瞑想実験」及び「瞑想実験」後の模式図



て、統計的に高い有意性のある実験データを示した研究は、我々のグループ以外では皆無である。

## 2. 実験方法

ピラミッドパワーを検出するための主な研究方法は、PS 内部に人間が入り、30 分間の瞑想 (ヘミシンク<sup>[7]</sup>) を午前 3 回、午後 3 回行うという方法であった。被験者は著者の一人である坂本政道であった。生体センサ (キュウリ果実切片) の作成、設置及びガス測定は、零点同時補正法 (simultaneous calibration technique: SCAT) によって行われた<sup>[8]</sup> (Fig.2)。この方法により、PS 頂点に設置された生体センサのガス生成反応に影響 (非接触効果) が現れたかどうかを検証した。非接触効果の大きさの指標として、ガス濃度 (2-ヘキサノール) から計算される較正 J 値 ( $J_{E-CAL}$ ) が採用された<sup>[9]</sup>。生体センサを使用して非接触効果を検出する測定法は、IRI で研究開発され、これまでにヒーラーによる非接触効果の検出やヒーラーの周囲に分布している生体場の検出等に成功している<sup>[10-12]</sup>。試料の Pair1 から Pair4 (Fig.2) を準備するためには、4 本のキュウリが必要であるが、これまでのピラミッドパワーの実験において 11,000 本以上のキュウリが使用された。

実験は、3 日間 (Day1-Day3) 継続される「瞑想実験」が行なわれた (Fig.3)。「瞑想実験」には、PS を使う実験 (Med(Using PS)) と PS を使わない実験 (Med(Not using PS)) の 2 種類があった。Med(Using PS) は、PS 内部に人間が入る前に行う実験 (Pre-meditation: pre1, pre2)、PS 内部で人間が瞑想している実験 (During meditation: med)、及び PS 内部から人間が出た後に行う実験 (Post-meditation: post1, post2) から構成されていた。同様に Med(Not using PS) は、PS 頂点と同じ高さの位置に設置された生体センサの下で瞑想をする前に行う実験 (pre1, pre2)、生体センサの下で瞑想している実験 (med)、生体センサの下から人間が離れた後に行う実験 (post1, post2) から構成されていた。pre1, pre2, med, post1, post2 は、それぞれ実験を行う時間帯が決められていた。「瞑想実験」の Med(Using PS) を行うための条件は、pre1 以前に 20 日間以上、PS 内部で人間が瞑想をしていないことであった。その理由は、一度でも PS 内部に人間が入り瞑想すると、人間による影響が十数日間検出されたためである<sup>[4,6]</sup>。条件を揃えるため、Med(Not using PS) の場合も、pre1 以前に 20 日間以上、PS 頂点と同じ高さの位置に設置された生体センサの下では、瞑想をしていなかった。また「瞑想実験」の後、数日から 20 日間経過する間に、実験 (post) を任意の時間帯で行うことがあった。

## 3. 実験結果

Fig.4 は、「瞑想実験」の Med(Using PS) における pre1 と pre2 の平均値の比較である<sup>[13]</sup>。縦軸  $J_{E-CAL}$  が較正 J 値であり、生体センサに対する非接触効果の程度を表している。pre1 は誤差の範囲でゼロである。それに対して pre2 は、1% 有意で  $J_{E-CAL}$  がプラスの値になっている。この結果から pre2 では生体センサに対する非接触効果の存在が認められた。誤差棒は 99% 信頼区間である。実験者が pre1 及び pre2 を行っている間、被験者は実験室から直線距離で 6.55 km 離れた自宅にいた。pre2 の非接触効果の原因が被験者にあると考えた場合 (それ以外の原因は今のところ考えられない)、pre2 の結果は長距離にまで影響が及ぶ非接触効果が検出されたことになる。ここではその効果を、未知なる遠隔作用と呼んでいる。そして我々は、未知なる遠隔作用が、PS によって人間 (被験者) の無意識 (フォースタイプ I) が捉えられた結果であると考えている。その理由は、Fig.6 の説明でおこなっている。

Fig.5 は、「瞑想実験」における Med(Using PS) と Med(Not using PS) とを比較した結果である<sup>[13]</sup>。ここでは夏期データ (昼の長さが 12 時間以上ある春分から秋分の間で行われた実験) のみを扱っている。三角が Med(Using PS) の結果で、丸が Med(Not using PS) の結果である。pre1, pre2 は黄色で表し、med は青で表した。これを見て分かるように、pre1 と med の結果はほぼ一致し、しかも誤差の範囲でゼロである。一方、Med(Using PS) の pre2 と Med(Not using PS) の pre2 との間には 5% の有意差が認められた。誤差棒は標準誤差である。従って、Fig.4 や Fig.5 の pre2 の結果から、その存在が実証された未知なる遠隔作用は、被験者が PS 内部で瞑想をした時にだけ現れる現象であることが分かった。このことから、PS が未知なる遠隔作用のアンテナとしての役割を果たしていること、もしくは、人間にとっての無意識状態におけるターゲットであることが示唆された。

Fig.6 は、pre2 に関して解析した結果である<sup>[13]</sup>。Fig.6(a) は、pre2 の時間帯における全データ (n=213) の結果をプロットしたものである (但し、5:00-5:29 と 8:30-8:59 の間にはそれぞれ 2 データしかなく、解析から除外した)。I-VI は、時刻を 30 分毎に区切った時間帯を表している。Fig.6(b) は、Fig.6(a) で示した pre2 の移動平均 (60 分窓) である。時間帯 III: (6:30-6:59) で  $J_{E-CAL}$  が最小値をとることが分かった。緑色の線は時刻 6:40 を示し、この時刻は PS 内部に入り瞑想する被験者の平均起床時刻である。従って Fig.6(b) より、人間 (被験者) が目覚める前後の時間

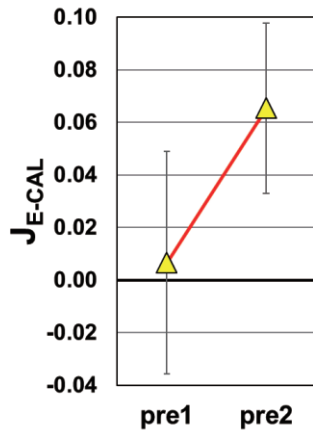


Fig.4 「瞑想実験」のMed(Using PS)におけるpre1とpre2の比較

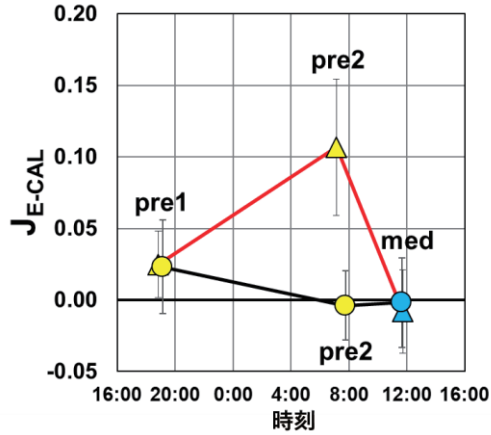


Fig.5 「瞑想実験」におけるMed(Using PS)とMed(Not using PS)の比較

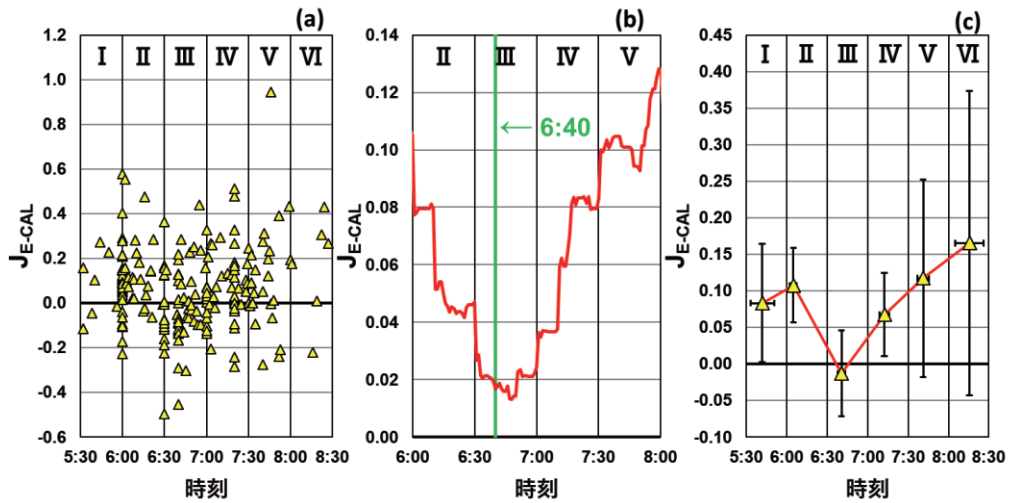


Fig.6 「瞑想実験」のMed(Using PS)におけるpre2の特性  
 (a) pre2の分布 (b) pre2の移動平均 (c) pre2の各時間帯の時刻平均とJ<sub>E-CAL</sub>の平均値

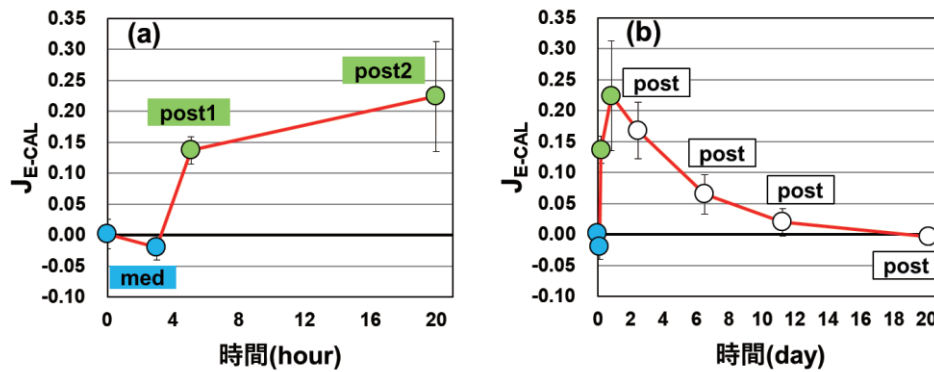


Fig.7 「瞑想実験」のMed(Using PS)におけるmed,post1,post2 及び「瞑想実験」後のpost  
 (a) med,post1,post2の平均値 (b) med,post1,post2,postの平均値



帯で未知なる遠隔作用が大きく、目覚めた時に未知なる遠隔作用がゼロとなる可能性が示唆された。これにより、未知なる遠隔作用は、PS 内部に入る人間が目覚める前の、睡眠中の無意識と目覚めた後の自覚のない意識状態とが影響しているものと考えられる。Fig.6(c)は、Fig.6(a)の各時間帯 I-VI に含まれるデータの時刻平均と  $J_{E-CAL}$  の平均値を示した。有意水準が 1%の時、時間帯 II と時間帯 III との間で有意差があった ( $p = 3.7 \times 10^{-3}$ ; ウェルチの両側 t 検定、これ以降の p 値も同様)。誤差棒は 99%信頼区間である。pre2 の解析の結果、人間が睡眠状態から覚醒状態へと推移する時間帯で、未知なる遠隔作用の時間変化が、目覚める時刻で最小値ゼロをとる下に凸の 2 次関数的な変化を示すことが明らかとなった。

Fig.7(a)は、「瞑想実験」の Med(Using PS)における med, post1, post2 の平均値を示した。また、Fig.7(b)は、Fig.7(a)で示した med, post1, post2 及び「瞑想実験」後の post の平均値 (4 点) を示した<sup>[4,6]</sup>。med に関しては、午前中の 3 回の平均値と午後の 3 回の平均値の 2 点がプロットされている。横軸は、午前 1 回目の瞑想開始時刻をゼロとして、それからの経過時間を表している。誤差棒は標準誤差である。Fig.7(a)の結果を見ると、med の後、つまり人間が PS から出た後に行われた post1, post2 で非接触効果が認められた (post1 の場合  $p = 3.5 \times 10^{-6}$ )。PS 内部の人間と生体センサとの距離は 0.5 m 程度であるため、ここで検出された非接触効果は、未知なる遠隔作用と較べると、短距離の非接触効果であると言える。そしてこの短距離の非接触効果の原因は、PS 内部に入り瞑想をした被験者によるものとは考えられない。しかし、PS 内部に入り瞑想をした被験者の何が非接触効果の原因になっているのかはまだ分からず、我々はそれを、フォースタイプ II と表現したのである。人間の無意識 (フォースタイプ I) による、遅延なく効果が現れる未知なる遠隔作用とは異なり、フォースタイプ II が原因となる短距離の非接触効果は、その効果が検出されるまでは時間がかかる遅延現象である。また短距離の非接触効果は、十数日という長期間にわたって検出され、約 20 日後には検出されなくなった (Fig.7(b))。この遅延を伴う非接触効果という現象は、既知の科学理論である過渡応答現象を記述する数式を用いることにより、非常に良く近似することができた<sup>[4,6]</sup>。

#### 4. 考察と結論

ピラミッド型構造物と人間が関わった実験において、次の 2 つの結果を得た。(1) PS は、6 km 以上離れた人間の無意識 (フォースタイプ I) を捉えて、遅

延なく検出可能なエネルギーに変換した。(2) PS は、PS 内部に人間が入り瞑想することによる影響 (フォースタイプ II) を蓄積し、時間をかけて検出可能なエネルギーに変換した。これらの結果から、ピラミッド型構造物と人間との関わりにおいて、人間から発する、2 つの異なるフォースタイプが存在することが示唆された。しかし、異なる種類のフォースタイプ I とフォースタイプ II は、PS によって、変換速度は異なるがどちらも生体センサが反応し得るエネルギーに変換され、非接触効果として検出されたと考えられる。実験から得られた 2 つの結果をより具体的に表現すると、(1) PS は、「瞑想実験」の Day2 の pre2 の時間帯で、その後実験室の PS 内部で瞑想する予定の人間 (被験者) の、睡眠状態から覚醒状態へと移行する間の無意識 (フォースタイプ I) を捉えた。そして PS によってフォースタイプ I は、生体センサに反応するエネルギーに遅延なく変換させられた。この PS の変換機能によって、実験室から 6.55 km 離れた所に居た人間の無意識が、未知なる遠隔作用 (長距離の非接触効果) として検出された。(2) PS は、PS 内部に人間 (被験者) が入り瞑想した場合、フォースタイプ II を蓄積し、時間をかけて生体センサに反応するエネルギーに変換した。この PS の変換機能によって、フォースタイプ II が 0.5 m (被験者の頭頂から生体センサまでの距離) の、短距離の非接触効果として検出された。この非接触効果は、PS 内部に人間が入り瞑想している間には検出されず、PS 内部から人間が出た数時間後から約 10 日後まで、長期にわたって検出された。従って、フォースタイプ II は、遅延を伴って検出可能なエネルギーに変換されたと考えられる。

人間の無意識 (フォースタイプ I) や人間による何らかの影響 (フォースタイプ II) は、現代科学においてほとんど未解明である。しかし、PS を利用した実験によってその存在と特性の一部が明らかになると考えられる。今後の研究によって、PS の機能やフォースタイプに関する科学的理解が進み、その応用分野が広がる可能性が期待される。

本研究の一部は「坂本ハイパーテック・プロジェクト (SHyP)」として、(株)アクアヴィジョン・アカデミー (代表取締役 坂本政道) と国際総合研究機構 (IRI) (理事長 山本幹男) の共同研究として行われた。

#### 参考文献

[1] Takagi, O., Sakamoto, M., Yoichi, H., Kokubo, H., Kawano, K. and Yamamoto, M.: Discovery of seasonal dependence of bio-reaction rhythm with



- cucumbers. *International Journal of Science and Research Methodology*. **9**(1): 163-175, 2018.
- [2] Takagi, O., Sakamoto, M., Yoichi, H., Kokubo, H., Kawano, K. and Yamamoto, M.: Relationship between Gas Concentration Emitted from Cut Cucumber Cross Sections and Growth Axis. *International Journal of Science and Research Methodology*. **9**(2): 153-167, 2018.
- [3] Takagi O., Sakamoto M., Kokubo H., Yoichi H., Kawano K., Yamamoto M.: Mediator's non-contact effect on cucumbers. *International Journal of Physical Sciences*, **8**(15), 647-651, 2013. (doi:10.5897/IJPS2012.3800).
- [4] Takagi O., Sakamoto M., Yoichi H., Kokubo H., Kawano K., Yamamoto M.: Discovery of an anomalous non-contact effect with a pyramidal structure. *International Journal of Sciences*, **4**(5), 42-51, 2015. (doi:10.18483/ijSci.714).
- [5] Takagi O., Sakamoto M., Yoichi H., Kokubo H., Kawano K., Yamamoto M.: An unknown force awakened by a pyramidal structure. *International Journal of Sciences*, **5**(6), 45-56, 2016. (doi:10.18483/ijSci.1038).
- [6] Takagi, O., Sakamoto, M., Yoichi, H., Kokubo, H., Kawano, K. and Yamamoto, M.: Necessary condition of an anomalous phenomenon discovered by a pyramidal structure. *Journal of International Society of Life Information Science*, **34**(2): 154-157, 2016. (doi.org/10.18936/islis.34.2\_154).
- [7] Atwater, F.H.: Accessing anomalous states of consciousness with a binaural beat technology. *Journal of Scientific Exploration*, **11**(3): 263-274, 1997.
- [8] Kokubo, H., Takagi, O., Koyama, S.: Application of a gas measurement method –Measurement of ki fields and non-contact healing. *Journal of International Society of Life Information Science*, **28**(1): 95-103, 2010. (doi.org/10.18936/islis.28.1\_95)
- [9] Kokubo H., Takagi O., Yamamoto M.: Development of a gas measurement method with cucumber as a bio-sensor. *Journal of International Society of Life Information Science*, **27**(2), 200-213, 2009. (doi.org/10.18936/islis.27.2\_200)
- [10] Kokubo H., Yamamoto M.: Controlled healing power and ways of non-contact healing. *Journal of International Society of Life Information Science*, **27**(1), 90-105, 2009. (doi.org/10.18936/islis.27.1\_90)
- [11] Kokubo H., Takagi O., Koyama S. & Yamamoto M.: Discussion of an approximated equation for special distribution of controlled healing power around a human body. *Journal of International Society of Life Information Science*, **29**(1), 23-34, 2011. (doi.org/10.18936/islis.29.1\_23)
- [12] Kokubo H.: *Ki or Psi - Anomalous Remote Effects of Mind-Body System*. New York: Nova Science Publishers, Inc., 2015. ISBN-10: 1634829549.
- [13] Takagi, O., Sakamoto, M., Yoichi, H., Kokubo, H., Kawano, K. and Yamamoto, M.: Discovery of an Unexplained Long-distance Effect Caused by the Association between a Pyramidal Structure and Human Unconsciousness. *Journal of International Society of Life Information Science*, **37**(1), 4-16, 2019.